今週の為替相場見通し（2017年7月10日）

総括表		先週の値動き				今週の予想レンジ		
		注	レンジ		終値			
米ドル	（円）		111.90	～ 114.18	113.90	112.00	～	115.00
ユーロ	（ドル）		1.1313	～ 1.1440	1.1408	1.1200	～	1.1500
（1ユーロ=）	（円）		127.89	～ 130.12	129.85	127.00	～	132.00
英ポンド	（ドル）		1.2867	～ 1.3025	1.2889	1.2750	～	1.2950
（1英ポンド=）	（円）	*	145.54	～ 147.62	146.86	145.00	～	147.50
豪ドル	（ドル）		0.7570	～ 0.7695	0.7608	0.7470	～	0.7670
（1豪ドル=）	（円）	*	85.67	～ 86.99	86.64	85.50	～	88.20

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

為替営業第二チーム　高田 裕

（1）今週の予想レンジ：　112.00 ～ 115.00 円

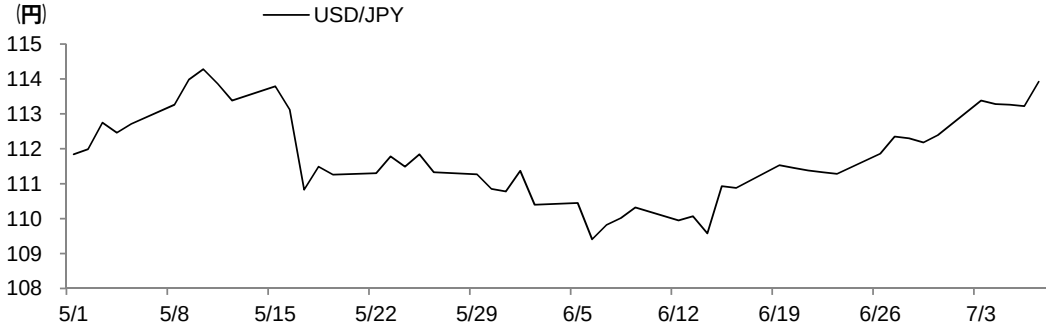
（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は上昇する展開。週初3日、前週末の東京都議会選挙における自民党大敗を受けて、シドニー時間にドル/円は週安値となる111.90 円をつけた。しかしその後は値を戻し、中国6 月製造業PMI の予想を上回る結果などを背景に112 円台後半まで上昇。さらに底堅い欧州株に連れて113 円丁度を上回ると、良好な米6月ISM製造業景気指数から113円台前半まで値を上げた。翌4 日は、北朝鮮が大陸間弾道ミサイルを発射したとの報道を受けて112円台後半まで急落。しかしその後ドル買いの動きが強まり113 円台前半までを値を戻した。週央5日は緊迫化する北朝鮮情勢から112円台後半まで下落したが、堅調な欧州株を背景にクロス円の買いが強まると113円台後半まで回復。しかしその後は原油価格の下落に米金利が低下するとドル/円は113 円台前半まで軟化。さらにFOMC議事要旨（6 月13～14 日）での「バランスシートの縮小開始時期に関し意見が分かれる」とのヘッドラインを受けて一時113 円丁度を割ったが、直ぐに113円台を回復した。翌6日は冴えない米6月ADP 雇用統計からドル/円は軟調となるも113円手前では底堅く推移。週末7日は日銀が国債買入れに関して指値オペを通告したことで113 円台後半まで急伸。さらに米6月雇用統計で雇用の強い伸びが確認されるとドル/円は週高値となる114.18円まで値を上げた。その後小緩みし結局113円台後半で越週した。

今週のドル/円相場は上値の重い展開を予想する。先週は良好な経済指標を背景に米金融引締め観測が台頭する中、日銀指値オペによる本邦金利の低下圧力から日米金利差拡大が意識されドル/円は約2か月ぶりに114円台前半まで上昇した。今週は12日(水)と13日(木)にイエレンFRB議長による上下院での議会証言が予定されており、拡大傾向を強める米国景気についてコメントが報じられた際にはドル買いの反応が予想される。しかしながら、米6月雇用統計では注目の時間当たり賃金伸び率は低調でインフレ懸念はやや後退した。また週末の日米首脳会談でトランプ大統領が対日貿易赤字について言及しており、一層のドル買いは進め難いのではないか。14日(金)には6月消費者物価指数（CPI）、6月小売売上高、6月鉱工業生産といった米経済指標が集中するが、先週のドル/円は2円近く上昇しており、良好な指標が報じられたとしても投機筋による利益確定の売り等が予想されるため、今週のドル/円相場は伸び悩むと考える。

（3）先週までの相場の推移

先週（7/3～7/7）の値動き：　安値 111.90 円　高値 114.18 円　終値 113.90 円



（資料）ブルームバーグ

2．ユーロ

為替営業第二チーム　下山 泰典

⑴ 今週の予想レンジ：　1.1200 ～ 1.1500　127.00 ～ 132.00 **円**

⑵ ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

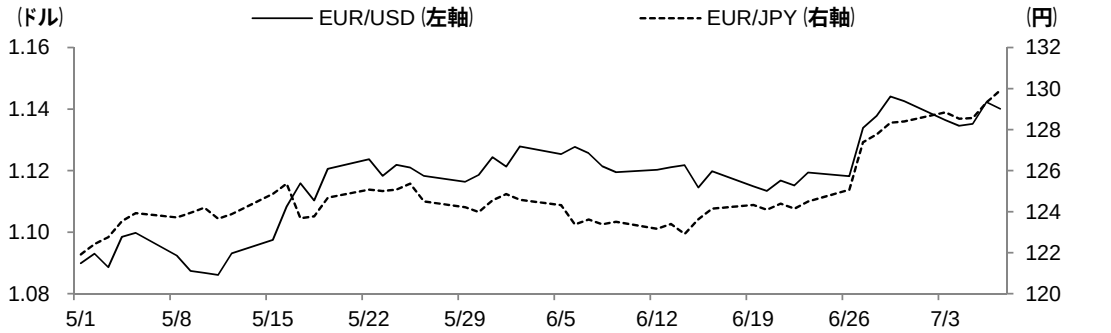
先週のユーロ/ドル相場は下に行って来いの展開。週初3日に対ドルでは1.14台前半で対円では128円近辺でオープン。対円では直後に週安値となる127.89円をつけたが、対ドルでは利益確定の売りと見られるフローに押されて1.13台後半まで軟化。その後も、米6月ISM製造業景気指数の良好な結果などを受けて上値重く推移した。4日は北朝鮮の大陸間弾道ミサイル（ICBM）発射を受けて円買いが強まり、ユーロ/円が急落する展開にユーロ/ドルは1.13台前半まで連れ安となったが、その後は米国が祝日のため1.13台前半で小動き。5日は米国が国連安全保障理事会で緊急非公開会合を開くよう要請したとの報にドル買いが強まり、対ドルでは一時週安値となる1.1313をつけたが、米金利低下を受けて1.13台後半まで反発した。6日は公表されたECB政策理事会の議事要旨のタカ派的な内容を受けてテーパリング観測が強まる中でユーロ/ドルは堅調。その後もバイトマン独連銀総裁のタカ派な発言などを受けて1.14台前半まで上値を伸ばした。7日は、強弱まちまちとなった米6月雇用統計の結果を受けて一時週高値となる1.1445をつけたが、このレベルでは売り意欲も強く、1.13台後半まで反落。対円では、同日アジア時間の日銀による指値オペにより他通貨に対して円売りが進行し、その流れの中で海外時間に週高値となる130.12円まで上昇した。結局、対ドル・対円それぞれ1.1408と129.85で越週している。

今週のユーロ相場はやや上値の重い展開を予想する。12日（水）・13日（木）に予定されているイエレンFRB議長の下院・上院での議会証言が材料視され、ドル主導でユーロの上値を押さえると考えている。足許、ユーロとドルともに中銀高官やFOMC・ECB政策理事会の議事要旨等でのタカ派的なトーンの発言・内容により金融政策面が材料視され、例えば対円ではいずれも騰勢を強めている。また、これまで緩和的なスタンスをとってきたECBが徐々にではあるが着実にタカ派的なトーンを強めてきたことで「ユーロ＞ドル」の構図も生じている。トランプ政権のロシアゲート疑惑やオバマケア代替法案などの政治懸念等をあわせて考えると中期的にはユーロにやや分がありそうだ。しかし、今週はイエレンFRB議長の議会証言がある一方、ユーロを巡る材料がやや乏しいため、値動きはドル主導で動く相場となりそう。議会証言は、先日公表されたFOMC議事要旨のトーンを踏襲した相応にタカ派的な内容になると考えている。先月公表された国際決済銀行（BIS）の年次報告書でもそうだが、主要中銀のスタンスは金融政策正常化の流れとの印象。特に米景気のピークアウトが取り沙汰される中、FRBに残された時間は少ないとも思われ、やや前のめりに利上げやB/S縮小に言及してくることも考えられる。IMMポジションを見ればユーロのロングポジションが相応に積み上がっているため、値動き次第ではある程度の値幅を伴った調整が入る可能性もあり注意が必要だ。ただ、ECBも金融政策正常化を志向しており、かつ世界最大の経常黒字を有するユーロに対しては下値での買い圧力も相応にあろう。また、イエレン議長が思いのほかハト派的なスタンスを示せば大きくドル売りに繋がることも考えられる。基本的には今週のユーロ相場は上値の重い展開を予想するが、上方向への警戒も怠らないようにしたい。

⑶ 先週までの相場の推移

先週（7/3～7/7）の値動き：

（対ドル）	安値 1.1313	高値 1.1440	終値 1.1408
（対円）	安値 127.89	高値 130.12	終値 129.85



（資料）ブルームバーグ

3．英ポンド

欧州資金部　近藤 敏樹

⑴ 今週の予想レンジ：　1.2750 ～ 1.2950　145.00 ～ 147.50 **円**

⑵ ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

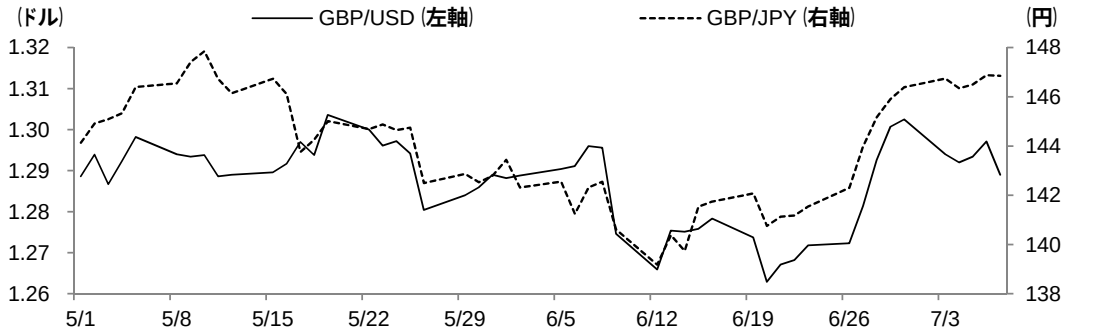
先週の英ポンド相場は、週前半の各種PMI（3日製造業、4日建設業、5日サービス業）、後半の軟調な鉱工業生産等指標を受け上値重い展開ながらも6月14日開催のFOMC議事録発表や米雇用統計等控え対ドルでは1.29台を中心としたレンジでの推移。週初3日対ドルで1.3000レベルにてオープンした英ポンドは英6月製造業PMIや米金利上昇を背景に対ドルで1.29台前半まで下落。火曜日は予想比弱めの英6月建設業PMIにも米国休日で動意に乏しい展開が継続し1.29台半ばの狭いレンジに終始。5日発表の英6月サービス業PMIの悪化も下値は限定的で一旦1.29割れとなるも往って来いの展開。6日やや弱めの仏国債入札をきっかけに欧州金利が上昇したことにもサポートされ底堅く推移し、特段ニュースが無い中1.2980近辺まで上昇するも1.30を試す展開とはならずその後は1.29台半ばで推移。7日金曜日は5月鉱工業生産指数及び製造業生産指数が予想を大きく下回ったことで英ポンドは対ドルで1.29台半ばから1.29台前半まで下落、対ユーロでは0.88台前半から0.88台半ばまで上昇。その後も英ポンドは上値重い展開が続き対ドルで1.29割れを示現。予想を上回る米6月雇用統計にも米金利が一時低下したことで英ポンドは対ドルで1.29台を一時回復するも結局上値重い状況は変わらず越週。また対円で英ポンドは146円レベルにてオープン後、終始146円台を中心とした展開。7日金曜日、日銀の5か月ぶりの指値オペで円金利上昇が一服したことを受けた円売りを受けて一時147円台を明確に上抜けするも予想比軟調な英5月鉱工業生産指数及び製造業生産指数を受けた英ポンド売りに147円台死守できず146円台半ばまで下落し、その後も上値重い展開のまま越週。

今週の英ポンド相場は、引き続き上値が重い展開を予想する。6月英中銀金融政策委員会では予想外に利上げ票が3票入ったことをきっかけに俄かに英中銀も利上げが近い、との思惑で英ポンドが買い戻される局面があったものの、直近の経済指標を具に確認すると弱い賃金上昇率やGDP等に加え、先週発表の英5月鉱工業生産及び製造業生産指数は大きく予想比下振れ、先行指標である6月各種PMI（3日製造業、4日建設業、5日サービス業）も全て全月対比悪化且つ予想対比下振れ。従って、英ポンド安を背景とした消費者物価指数の上昇傾向のみが利上げを正当化できる材料と言えるだろう。12日（水）に週平均賃金、失業率等雇用関連指標が発表されるが、賃金の伸び鈍化が再確認されれば消費者物価指数が上昇する中、個人消費への影響が懸念される。そうなれば英中銀による早期利上げ期待も徐々に剥落していくことになるのではないだろうか。金融機関のロンドンからの大陸シフト報道も徐々に見え始め、海外からの投資縮小・個人消費冷え込み等、これからがブレグジットの影響が本格化するフェーズであり、積極的な英ポンド買戻し材料はポジションの巻き戻し以外に乏しいだろう。EU離脱再投票の可能性もゼロではないが現段階では非現実的と言わざるを得ないだろう。EU離脱交渉ではEU代表対比英国側の準備不足の声も聞かれ、不透明感が払拭されることは当面期待できない。但し、今週は新規材料に乏しいことを勘案し、値幅を伴う展開は想定せず引き続き上値重い展開を予想する。

⑶ 先週までの相場の推移

先週（7/3～7/7）の値動き：

（対ドル）	安値 1.2867	高値 1.3025	終値 1.2889
（対円）	安値 145.54	高値 147.62	終値 146.86



（資料）ブルームバーグ

4．豪ドル

為替営業第二チーム　島田 貴章

⑴ 今週の予想レンジ：　0.7470 ～ 0.7670　85.50 ～ 88.20 **円**

⑵ ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

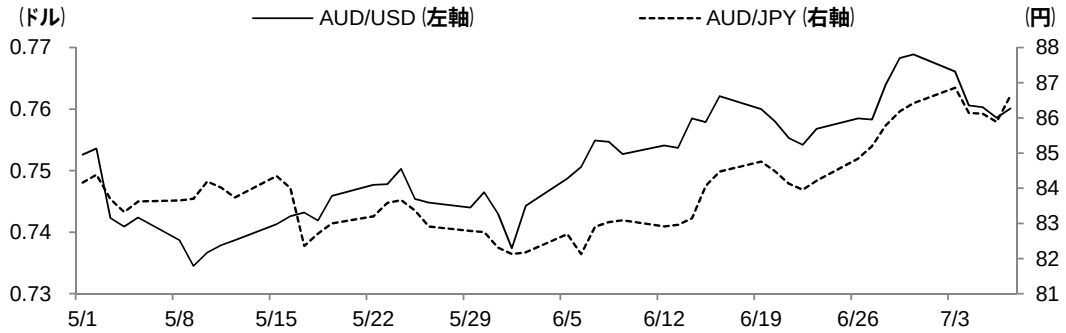
先週の豪ドル相場は豪州連邦準備銀行（RBA）政策理事会の結果や原油先物価格の下落を受けて軟調推移。週初3日、豪ドル相場は対ドル0.76台後半でオープン。週高値となる0.7695をつけるも事前予想を下回った豪5月住宅建設許可件数(前月比▲5.6％/予想：同▲1.3％)の結果を受けて軟化。海外時間には米6月ISM製造業景況指数を受けたドル買い進行の中で、豪ドル相場は0.76台半ばまで下落。翌4日、事前予想対比良好な結果となった豪5月小売売上高(前月比+0.6％/予想：同+0.2％)を受けて週高値に迫る0.7680台まで上昇。その後のRBA政策理事会では政策金利1.50％の据え置きが発表された。政策金利据え置き自体は事前予想と整合的であったものの、一部で警戒された声明文のタカ派化が実現しなかったことで豪ドル相場は大きく下落し、一時0.76を割る展開。週央5日、「ロシアが原油減産幅の拡大に慎重な姿勢を示した」との報道を受け、原油先物価格が下落する中で豪ドル相場も軟調地合となり、週安値となる0.7570を示現。翌6日、予想を大幅に上回る結果となった豪5月貿易収支(AUD2,471Mio/予想AUD1,000Mio)であったが、前月分の下方修正も実施された為に影響は限定的で、0.75台後半での推移が続いた。週末7日、米6月雇用統計では非農業部門雇用者数が予想を上回る増加という結果が示されたものの、平均時給は予想を下回る増加に止まった為、為替市場への影響は限定的。豪ドル相場は0.76ちょうど近辺水準にて越週した。一方、対円では86円台前半でオープン。4日のRBA理事会までは堅調に推移し、豪5月小売売上高の結果を受けて週高値86.99円を示現。その後は対ドル同様にRBA理事会結果や原油先物価格下落の影響を受けて軟調地合となり、5日に週安値85.67円をつけた。翌6日は86円ちょうどを差はさんだレンジで推移したが、週末7日にはドル/円に牽引される形で水準を切り上げ、86円台半ばにて越週した。

今週の豪ドル相場は上値重い展開を予想する。今週の注目材料は12～13日に予定されるイエレンFRB議長による議会証言である。先週の米6月雇用統計で示されたように、米国の雇用ひいては経済活動の状況は比較的良好な状態にあると考えられる。一方で賃金の伸びは抑制されており、換言すればインフレ加速の兆候は一向に見られない。斯かる中で注目される米金融政策動向であるが、イエレン議長を始めとするFRB主流派のスタンスは足許のインフレ指標が実際に上昇していなくとも金融政策正常化を推進するとの姿勢であるように見受けられる。今週の議会証言においても同様のスタンスが踏襲されるとすれば、どちらかと言えば議長のタカ派的発言とそれを受けたドル上昇が想定され、豪ドル相場は軟化し易いと予想する。また、原油先物相場の軟調地合も気にかかる点であり、足許の水準で原油価格が低迷する場合には、豪ドル相場の上値は押さえられることとなろう。なお、その他の主な経済指標・イベントとしては、11日(火)に豪6月NAB企業信頼感、12日(水)に豪7月ウエストパック消費者信頼感指数の発表が予定されている。

⑶ 先週までの相場の推移

先週（7/3～7/7）の値動き：

（対ドル）	安値 0.7570	高値 0.7695	終値 0.7608
（対円）	安値 85.67	高値 86.99	終値 86.64



（資料）ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。